



セブンスブレイブ 1

チート?NO!もっといいモノさ!

η L P η η L I G η T

乃塚一翔
nozuka issyou



アルファライト文庫 

Samurai



ミマサカ

美作サクラ

18歳。小柄で巨乳の和風美人。
物静かなBL専門の腐女子。

Sniper



ユキシロ クロ

雪代九々

18歳。クラス委員。
常識的な感性を持った苦勞人。

?????



イヌブシ ヤコウ

成伏夜行

18歳。本編の主人公。
異世界でまさかの料理人に!?

主な登場人物 Main Character

Pharmacist



マレイシャ

16歳。エルフの薬師。
とにかくポジティブな天然少女。

Princess



クリュス=ラ・ヴァン

21歳。「帝国」の第2皇女。
食い意地だけは誰にも負けない。

Machinery General



キシマ チカゲ

鬼島千影

18歳。脳味噌筋肉。
いつも豪快でテンションが高い。

Slayer



ダテマサチカ

伊達雅近

18歳。夜行の幼馴染。
怠惰なイケメン。頭の良さは本物。

Blacksmith



ニーヴァ

600歳以上。エルフの鍛冶師。
露出癖のある残念美女だが腕は確か。

Caesar



ホロンイン ツツジ

鳳龍院躑躅

18歳。人目を引くお嬢様。
本性は真性のサディスト。

Assassin



ヤナギモト ヘイスケ

柳本平助

18歳。エロスに生きる男。
ブレイキの壊れたスケベ魂を持つ。

セブンス
SEVENTH BRAVE
ブレイブ

蒼い満月が昇る夜だった。

大国と名高い『ラ・ヴァナ帝国』の首都、通称『帝都』。帝都を覆う外壁、その北門にて。

「……ん？」

それに気付いたのは、門前に立っていた2人の警備兵の片割れだった。

淡い蒼に照らされる、街道の彼方。

紅い何かが、こちらへと向かって来ていた。

「おん？ どーした、兄弟」

相方の訝しげな表情を疑問に感じ、もう1人の警備兵が声をかける。

「いや、あつちに何かが……」

「お？ 何処だよ、なんも見えねーぞ」

あまり夜目が利かないのだろう。指差される先を見ても、視界に映るのは夜闇だけだっ

た。警備兵達がそうやって問答をしているうちに、紅い何かはどんどん近付いてくる。尋常ではない速さだった。小さな影だったそれは瞬く間に大きくなり、ぼやけた輪郭を明確にしていく。

やがてもう1人もまたその存在に気付く。彼らが馳けながらも紅い影の全容を把握するまで、1分もかからなかった。

「ありや、人か!？」

蒼の中に浮かぶ、ダークレッド。

風になびくコート裾は、揺らめく炎を思わせる。

まるで地を這う獣のような姿勢で、1人の男が駆けて来ていた。

「何てスピードだ！ まさか魔族!？」

「クソッ止まれ！ 止まらんか！」

緊張と共に、怒声を上げる警備兵。しかし男は止まらない。

それどころか、目深に被ったフードの隙間から覗く口端をにいと吊り上げ、更に加速した。

「チィ……ッ！ こうなったらやるしかないぜ、兄弟！」

「相手は恐らく魔族だ！ 同時にかかるぞ！」

敵対種である魔族ならもちろん、怪しげな者であれば、都内に進入させるワケにはいかない。

戦闘を覚悟し、武器を手取る2人。

だが、間合いへと入る直前、眼前まで迫っていた男の姿が、跡形も無く消えた。

「なっ!？」

想定外の出来事に、警備兵達は慌てふためく。

周囲を見渡し、蒼い闇夜の中で殊更に異彩を放っていた紅を探す。

「ヒヤッハハハハハハハ!!」

不意にそんな笑い声が響き渡ってきたのは、頭上からだった。

まさかと思いついながらも、反射的にその方向を見上げる警備兵。

男が、空に居た。

「が、外壁を跳び越えただと!？」

「んな馬鹿な！」

帝都を守る為に張り巡らされた、高さにして15メートルは下らない巨大な外壁。

男は、それを易々と跳躍で越えていた。

「ああ……この景色！ この風！ この肌触り！」

蒼い月光をその身に浴び、紅い姿が照らされる。
ふわりと音も無く、男はレンガ造りの地面に降り立った。

「ようやく帰ってきた……ここが本当のスタートラインだ!!」

男——戌伏夜行は、高らかに吼えた。

Ψ

某県某市、私立川ヶヶ岬高校3年2組。

何の変哲も無い学校、何の変哲も無いクラス。

そんな普通を絵に描いたような組織に所属していた生徒達は、ある日、教室ごと異世界に召喚された。

「……は？」

最初に異変に気付いたのは、教室の最前列中央という、大変有り難くない席に位置する

戌伏夜行だった。

鬱陶しい授業が終わり、昼休みに入って弁当を食べようとしていたら……突如、目の前の黒板が消えたのだ。

一瞬景色がぐぐりと歪んだかと思えば、全く別の場所にいた。

頭の理解が追いつかず、おかずに伸びていた箸も止まる。

「どーしたヤコ、目え丸くして……なんでえこりや」

彼の傍で焼きそばパンを齧っていた、大柄で見るからに屈強そうな強面男、鬼島千影もまた、周囲の異変に言葉を失くした。

すぐに他のクラスメイト達も騒ぎ始める。

夜行達が居たのは、中世ヨーロッパの聖殿をそのまま再現したかのような場所であった。周囲には鎧を着て武器を携えた者や、黒いローブを身に纏った者。そんな時代錯誤的な格好をした者達が、ずらりと並んでいる。

そんな中で、机や椅子が教室と同様の配置で存在する光景は、酷くシュールだった。

「あ、何だ夢か。ちー君ちよい殴って、起きるから」

「ん？ おう、分かった」

「ぶはふっ!？」

外見通りの膂力りよくで千影に殴られた夜行が、椅子と机を幾つか巻き込んで吹き飛んだ。数秒後、顔を押しさえてよろよろと起き上がる。脚は生まれたての小鹿の如く震えていた。

「痛い、痛過ぎる……頼んだのは俺だけど、出来ればもっと手加減して欲しかった……！」

「わりわり、つい。で、起きられそうか？」

「鼻が折れるかと思ったわ！ 夢であつてたまるかこの痛み！」

涙目で夜行が喚く。相当痛かつたらしい。

そうこうしているうちに、喧騒けんそうの声が少しずつ小さくなっていく3年2組の面々。

が……落ち着いてきたというよりも、理解不能な現状に対しての不安から押し黙ってしまった、というのが正しかった。

ざわめきが収まる頃合いを見計らつたのか、夜行達を取り囲んでいた人垣ひとがきの奥から、1人の少女が進み出てくる。

シンプルながらも高価であることは一目瞭然いちもくりょうぜんなドレスに身を包み、小柄でふちの無い眼鏡がねをかけた中学生くらいの少女。セミショートに切り揃えられた水色の髪は、染髪せんぱつとは思えない程の鮮あざやかな色合いだった。

事態を全く呑み込めていない夜行達へと、ゆっくり歩み寄る彼女。その後ろには、鎧よろいを着た大柄な男が2人控ひかえていた。

必然、夜行達の間には、緊張けんじょうが奔はしる。

「異界へようこそ、勇者様方。わたしの名はクリュスⅡラ・ヴァナ、この『ラ・ヴァナ帝國』の第2皇女で御座います」

どこか眠たげな表情に似つかわしい、ゆるりとした口調。

クリュスと名乗つた少女は恭しく跪ひざまずくように膝を折り、たじろぐ夜行達に一札する。

「まずは御詫おわびの言葉を。此度は不躰ぶたいにもお呼び立てしてしまつたこと、大変申し訳なく思っております。現状についての御説明を——」

ふと、クリュスの言葉が止まつた。

それだけでなく、ゼンマイの切れた人形のように、動きまでもが止まつていた。

何事かと思ひ、近くにいた夜行が恐る恐る顔を覗き込む。

瞬まばたきさえも忘れたクリュスの目は、ある一点に向けられ文字通り微動びどうだにしていなかつた。

「……？」

首を傾かたむけ、クリュスの視線の先を追う。

その先には、椅子や机が倒れたにも拘らず奇跡的に無事だった——夜行の弁当があった。

「……………」

いやいやまさか、と夜行は思う。

何かの間違いだろう、とも。

しかしながら、やはり確証は持てない。

かぶりを振りながらも、ひょいと弁当箱を持ち上げてみる。

「ッ！」

それと同時に、クリユスの視線が上がった。

続けて右へ左へと、弁当箱を動かす。

動きに応じて、クリユスの視線も右へ左へ移動する。

完璧に、弁当がホーミングされていた。

Ψ

もつきゅもつきゅ。



そんな擬音を立てそうな勢いで、クリュスが夜行の弁当を頬張る。

「申し訳ありませんね。なんかおねだりしたみたいで」

「……いや、別にいいんだけどさあ」

氣の抜けた返事をする夜行。彼女の無言の要求に屈して弁当箱を渡した際、緊張まで何処かに行ってしまった。

クラスメイト達も同様に毒氣を抜かれたようで、少なくとも先程のような張り詰めた空気が薄れていた。

代わりに、クリュスの後ろに居る騎士風の格好をした男達は、今にも頭を抱えそうな表情をしていたが。

「腹ペコ系美少女……いいわ、マジいいわ!」

「黙りなさい」

鈍器が叩き付けられるような音が背後で響き、それと入れ替わりに、さつきからうるさかったハアハアという荒い息遣いが消えた。

振り返らずとも大体の事情——ある女子がある男子をぶん殴った——を把握した夜行は、呆れた風にひとつだけ溜息を吐く。

ちなみにこうしてクラスごと全く別の場所に移転したのだが、3年2組に所属する生徒

全員がここに居るワケでもない。

夜行達に異変が起きたのは、昼休みに入って5分少々が経った頃。

昼食のため、購買組はチャイムと同時にクラウチングスタートを切り、学食組も疾うに教室を出ていた。残る弁当組も半数近くは屋上や部室で食べることを選び、結果として教室に居たのはクラス総員35名の内、僅か7人。

つまり5分の1のツイてないメンバーの中に、夜行は入ってしまったのだ。

もつとも、それを真に自覚するのは、邂逅早々他人の弁当に舌鼓を打つ、クリュスからの説明を仔細に聞いてからであるが。

「もきゅ……んく。御馳走様です、大変美味しゅう御座いました」

弁当を綺麗に平らげたクリュスが、ぺこりと一礼する。

あまりに深々と頭を下げてくるものだから、ついつい夜行も「お、御粗末さまでした」などと返しつつ、同様に頭を下げてしまう。

どうでもいいが、やや細身とは言え仮にも男子高校生である夜行の弁当を3分足らずで完食するとは、中々侮れない少女であった。

「さて。では少々脱線してしまいましたけれど、お腹もそこそこ膨れたところで説明に入

らせて頂きます」

クラス7人（1人死亡中）一同は思った。

脱線させたのは自分だろう。そしてあれだけ食べてそこそこかよ、と。

早いところ説明に入って欲しかったこともまた全員の総意だったので、誰もそれを口には出さなかったが。

「ああ、ですが……ふあ……なんだか、食べたら眠くなってしまいました。説明、明日でいいですか？」

「「さっさと話せや!!」」

くしくし目蓋を擦るクリュスに、夜行達の怒声が飛ぶ。

彼女の後ろに控える騎士達が、この上なく申し訳無さそうな顔になった。

「軽いプリンセスジョークなのに……」

いや、絶対半ば以上本気だった。明日でいいと言ったら、確実にそうになっていたはずだ。小さく咳払いをして、場を仕切り直すクリュス。

「ではまず……ここは、皆様方が今まで生きてこられた世界ではありません。分かりやすく言えば、異世界なのです」

しん、と、再び生徒一同からざわめきが消えた。

静寂を破つたのは、とんとんという、夜行の肩を控え目に叩いた細い指の音。

振り返ると、何時の間にかすぐ後ろに女の子が1人いた。

「戌伏君……あの子、何を言ってるのでしょうか……？」

鳳龍院躑躅。

腰まで伸びる艶をたつぷりと含んだ栗毛と、常に優しく細められた目付きが愛らしい夜行のクラスメイトだった。

仰々しい名前からも予想のつく通り典型的なお嬢様で、その気品ある立ち居振る舞い故に、入学当初から学園でも屈指の人気を誇っていた。

所謂学園のアイドル、というやつである。

夜行とは1年の頃からずっと同じクラスで、こうして気軽に声を掛け合う程度には親交があった。

柔らかな笑みの形で固定されている、と言っても過言ではない躑躅の表情が、今は僅かながらも確かな困惑を示していた。

そんな姿を珍しいと思いつつも、夜行が小声で返す。

「気にしない方がいい、鳳龍院さん。きつとアレだ、春先によく出てくる人だ」
 「まあ……そろそろ初夏かに入りますのに、お可哀相……」

2人のひそひそ話に千影も加わる。

「いや、ただの厨二ちゆうにじゃね？ 丁度、見た目からして歳もそんなぐらいだろ」

彼等の中では、既に眼前まへの少女が厨二病患者であるとの共通認識が生まれつつあった。それに応じて、クリュスを見る目が自然と生温なまめだかくなる。

「……？ さて皆様方を、この世界へと召喚させて頂いた理由ですが——」

そんな視線を訝いぶかしみながらも、クリュスは淡々とした声音こゑで続ける。

話が進むに連れ、一同の表情は徐々に驚きへと変わっていくのであった。

Ψ

「——以上です。御理解頂けたでしょうか？」

およそ30分、或いはそれ以上か。

それだけの時間をかけて、クリュスより現状の説明が行われた。

そして最後に、クリュスが僅かに首を傾げながらそう問う。

夜行達7人は各々驚きや困惑などが織り交ざった複雑な表情かおを見せつつも、一応の理解は出来た様子であった。

クリュスの話を大まかに纏まとめると、こうだ。

- ・ここは『大陸』と呼ばれる異世界の中央部に位置する、『ラ・ヴァナ帝国』である。
- ・大陸は北側と南側で分断され、それぞれ北を『魔族』が、南を『人間』が治める形で住み分けされている。
- ・近年、魔族が人間の領土に侵攻を始め、現状は大規模な戦争となる一歩手前。
- ・クリュスを筆頭とする帝国上層部が、戦争に勝利する切り札ふだとして『勇者召喚』を行なった。
- ・その勇者というのが、夜行達である。

話の合間に差し挟はさまれた遣り取りによって、異世界なのに言葉が通じる理由や、どうやって召喚されたかといった事柄も明らかになった。

しかし魔法がどうだの認識置換がどうだのと小難しい話だったので、夜行は半分以上聞き流していた。

「ふむ。つまり君は、オレ達に戦争へ参加しろと?」

「そう尋ねたのは、伶俐な雰囲気を持った、男にしてはやや長髪な美形。」

「夜行の親友、伊達雅近である。」

「有体に言えばそうなります」

「……回りくどい言い訳をしないことは評価に値する。幾ら理屈を並べたところで、誠意など感じられないからな」

「ややもすれば必ずり落ちそうなクリュスのものとは雰囲気の違う、細めの眼鏡をクツと上げ、頷く雅近。」

「これまた珍しいことに機嫌が良さそうだと、彼の姿を見て夜行は思った。」

「雅近はいかにも几帳面な外見に反して、その実、面倒事を極端に嫌う。」

「故に冗長な言い回しをせず、ストレートに本筋を伝えてきたクリュスに、一種の好感を覚えたのだろう。」

「と、言っても——。」

「だが、断る」

「要求を受け入れるかどうかは、全くの別問題であつた。」

「内容が、魔族などという明らかにヤバげな輩相手の戦争に参加して欲しい……なんてモノであれば、当然である。」

「真面目で融通が利かれないと思われがちだが、ネタを好む性質の雅近は、ドヤ顔で言い放つ。」

「「そもそもオレ達は忙しい。高校3年……ただでさえ面倒な大学受験やら就職活動やらで切迫しているんだ。魔族だか魔王だか知らないが、そんなのを相手している暇は無い。今すぐ元の教室に戻してもらおうか」

「「そうだそうだ! 俺とヤコなんて今週末に合コンあんだぞ!? やつとのことで聖女の友達と取り付けたこのチャンス、逃してたまるか!!」

「雅近に続き、千影も反対の意を示した。」

「ちなみに聖女とは『聖花女学院』の通称であり、ハイレベルな容姿の生徒が集まっていると近隣で名高いお嬢様学校である。」

「躑躅も最初はそっちに入学する予定だったらしい。」

「「……そうですか。やはり、そう簡単には承諾して頂けませんか」

「「そりゃま、普通はね。俺だってヤだし」

「顔を俯かせるクリュスに声をかける夜行。」

そもそも戦争に参加したところで、役に立てるかどうか。生まれてこの方、武器なんて使ったこともないし。

周りを見ても、乗り気な面子は1人も居ない。

当たり前だ。いきなり異世界に前触れ無く喚び出され、戦ってくれなど冗談ではない。

「さっきの話を聞くに、召喚されてすぐなら、あっちの大門を通って帰れるらしいな。行くぞ、皆」

雅近に応じて、千影も踵を返す。

「おう。んじゃ、さっさと帰ろうぜヤコ」

「はいはいっと。どうせもう午後の授業始まってるし、このままサボってカラオケでも行こうか」

「私、ずる休みなんて初めてです……ふふっ、何だかワクワクしますね」

夜行の提案に笑顔で乗る躑躅。

既に全員帰る気満々で、雅近を先頭に「帰還の門」へと歩いて行く。

「——無論、タダとは言いません」

びたり。

クリユスのその言葉に、夜行達の足が止まった。

「元より皆様は、この世界の確執に何ら関わりが無い御方々。確かにいきなり喚び出した上、異世界の為に戦ってくれなど虫の良過ぎる話」

ですから、とクリユスが続ける。

「——我がラ・ヴァナ帝国は、人間の治める領内に於いて最も栄える国。もし助力をお約束頂ければ、それなりの報酬をご用意いたします。

——山のような金銀財宝が思いのまま。7代先まで贅の限りを尽くせましょう。

——世界中の美味珍味も選り取り見取り。存分にこの世界の食を堪能して下さいませ。

——美男美女も口説き放題。敵方の魔族には、サキユバスやダークエルフなんて美形揃いの種族も存在します。捕虜とするもどうするも、勇者様のお好きなように。

——その他、財力権力でどうにかなる望みであれば、当国が全て叶えて差し上げます」

3度目の静寂が訪れた。

やがて声を押し殺すように、夜行が笑い始める。

「クク、ククク……聞いた？ マサ、ちー君。このお姫さん、俺達を買収するつもりらしいよ」

「呆れてものも言えんな。札束で頬を叩かれた気分だ」

「これだからお偉い奴はよお……金さえ積めばどうにかなると思ってたやがる、嫌にならぬぜ」

3人から、剣呑な雰囲気が出てくる。

『買収』などという俗物的な行為が、彼等の気分を著しく害したのだろうか、クリユスの背後に立つ騎士達が顔を曇らせ、思わず武器に手をかける。

そして。

「その話乗ったあッ!!」

騎士達がずっこけそうになった。

「財宝……これでオレは一生働かないで済む!」

「美味珍味、楽しみだねえ……」

「ダークエルフ! サキユバス! まさに男の浪漫だ、合コンなんぞもうどうでもいい!」

一転して掌を返す雅近、夜行、千影に、啞然としたのは残るクラスメイト達である。ただ、それも一瞬のことだった。

「戌伏君達がやるんでしたら、私も参加致します。何だか面白そうですね」

「俺っちもやるぜ! うひひひ、美女美少女……たまりませんなあ!」

「……やる」

ほんわか笑う躑躅と、もう2人。柳本平助、そして美作サクラが名乗りを上げた。

学園でも『スケベ』『変態』『女の敵』と名が知れ渡っている平助の脳内は、既にピンク色の楽園となっているようで、だらしなく顔が緩んでいた。

ちなみに、先程「腹ペコ系美少女」という不用意な発言をかまして殴られたのは、この男である。

対して、小柄な体躯に陰の差した表情が特徴的なサクラ。

普段から口数が少なく、変わり者と言われる彼女の心中は、さほど親交の深くない夜行には窺えなかった。

とにかく、これで一気に6人。慌てたのは瞬く間に孤立した最後の1人である。

キツめの目をしたショートカットの少女、クラス委員の雪代九々が声を張った。彼女が平助を強制的に気絶させた張本人だ。

「ちよ、本気なの貴方達!? ゲームじゃないのよ、戦争だつて言われたでしょ!? 人が死ぬのよ!」

「承知の上だ。敵方には、オレの素晴らしきニートライフが為の贄となつてもらおう。そもそも人間は、大なり小なり他人の生命を喰つて生き長らえている」

無駄に男前な顔で、とてもかつこ悪いことを堂々と言い放つ雅近。

「自分が死ぬかも知れないって言つてるのよ!! それに今帰らなかつたら、当分は戻れなくなるんですよ!」

「人は死ぬ、いずれ死ぬ。ニート道を窮める為、志半ばで果てるのならそれも本望だ」

「何その無駄に固い意志!」

てか、ニート道つて何だ。

「あなたねえ……もう少しちゃんと考え——」

「委員長! 貴様にひとつ、真理を教えてやる!」

「はい? 真理?」

首を傾げ怪訝な表情をする九々へと、一拍置いて雅近が叫んだこと。

「現代日本でまともに就職するより——魔王でも魔族でも倒す方が、百倍は楽だ!!」

それは確かに、真理なのかもしれない。

そんな雅近の魂からの叫びに、九々は啞然とした。まさに『ぐうの音も出ない』という有様を、実体験させられたかのように。

そして、その1分後。

夜行達7人は誰一人として欠けることなく、勇者となることを決意したのであった。

㍶

「戌伏夜行。生活スタイルは昼型。関係ないけど、どっちかつつーと猫派」

「鬼島千影だ。『川ヶ岬高校ベンチプレスが似合う男』ランキング、2年連続1位」

「伊達雅近……好きな言葉は『悠々自適』、嫌いな言葉は『骨折り損』」

「鳳龍院躑躅と申します。犬派です」

「柳本平助! エルフは耳が弱いつて割と鉄板スけど、マジツすか?」

「……美作サクラ……よろしく……」

「雪代九々です。これからお世話になります」

「はい、勇者様方。快い御協力、誠に有難う御座います」

……やべえ、なんかやたらとキャラの濃そうな連中が集まったぞオイ。

自己紹介する夜行達の姿を見て、クリュスの後ろに控える騎士2人が思ったことである。「では皆様。早速ですが、ステータスの御確認をお願いできますか？」

「先程の話にあった、個人の能力を数値化して表すという奴だな。どうすれば出せる？」雅近が問うと、騎士達が前へと進み出てきた。

彼らは夜行達全員に、掌に収まるくらいの大きさの黒い金属板を手渡すと、元の位置に戻る。

「そちらは『パーソナルカード』と言って、この世界で最も数多く作られている『魔具』です。ステータスの開示には、主にそのカードを使用します。身分証にもなりますので、失くさないよう御注意下さい」

と言うことで、まずは手渡されたパーソナルカードに持ち主を認証させる流れとなった。その為には、対象者の血を一滴カードに垂らさなければならぬらしい。

メンヘラじゃあるまいし、自分を傷付けるなんて行為には抵抗あるなあ……と夜行は思ったが、やらないことには話が進まない。

苦い顔をしながらも、貸してもらったナイフで親指の付け根辺りを軽く切り、滲み出た

血をカードに擦り付ける。

すると黒いカードが一瞬、淡く発光した。どうやらこれで認証完了のようだ。

他の面子も同じようにして、カードの認証を終わらせる。

ワイルド気質な千影に至っては、指先を噛んで血を出していた。逆に手間取ったのが、躑躅であった。

「い、痛くないで下さい……成伏君、お願いですから……!」

「多少の痛みは仕方ないし、あと震えを止めてくれ。手元が狂う」

自分ではどうしても刃物を指に突き立てられず、文字通り夜行の手を借り何とか完了。やはりお嬢様育ちには、自傷行為は厳しかったようである。

ともあれ、ひと悶着ありつつも全員無事カードの認証が終わり、いよいよステータスの開示となった。

「では、その方法ですが」

使い終えたナイフの刃をハンカチで拭いながら、クリュスが一拍置く。

必然、夜行達全員の視線が彼女へと集中する。

「自身の思う最高にカッコいいポーズを決めつつ、声の限り叫んで下さい。』オープン・

「ザ・ステータス！」と」

「……………はい？」

クリユスの放った言葉は、夜行の想像を遙かに超えていた。ナイフで指を傷付ける、なんて程度の話ではない。

7人全員が絶句する。

「……………冗談、だよな？」

「マジですヤコウ様、私は冗談なんて言いません。この世界では常識です。町に出れば皆してポーズ決めまくりの叫びまくりですよ」

明らかに嘘だ。

何故なら彼女の後ろに控える騎士達も、驚愕の表情になつていたのである。そもそも、さつきからプリンセスジョークとか普通に言つてたし。

しかし、その冗談を真に受け、且つ覚悟を決めてしまった人物が1人。

千影である。

「ツ……………オ、オープン・ザ・ステータアアアアアアアアアアスツ……………！！」

顔を羞恥で赤く染めながら、荒ぶる鷹の構えで千影が叫ぶ。

………………………………………。

………………………………………。

10秒が経過。彼の持つパーソナルカードは、何の反応も示さない。

夜行も雅近も他のクラスメイトも、クリユスの後ろに居る騎士も、周囲から遠巻きに見える者達も。

誰もが気まずそうに、千影から目を逸らしていた。

そんな中で、クリユスが口を開く。

「……………うわ……………冗談はさておき、カードを持って『ステータスよ開け』みたいなことを念じれば、普通に表示されます」

「ヤコオオオオオツ！ 伊達ええええツ！ 離せ、離してくれ！ こいつだけは1発殴らなないと気が済まねえツ！！」

「抑えるんだ、ちー君！ 後ろのおじさん達が凄いで頭下げてるから！」

「あんなでも、このポロ儲けを提供してくれた、謂わば雇い主！ 報酬をもらうまでは耐える、鬼島！」

夜行、雅近による必死の説得により、どうにか怒りの矛先を収める千影だった。

とにかく今はステータスだ、と気を取り直し、手にしたパーソナルカードを見ながら、

夜行達はそれぞれ念じる。

(ステータスよ、開け)

.....

数秒が経ち、夜行は眉を蹙めた。

何も表示されなかったのだ。カードはうんともすんとも言わず、ただ黒い光沢を放つのみ。

やり方が間違っているのかと思いつつ、夜行はなんとはなしに他の面々を見回してみる。

「なあヤコ、どうだったよ？ 俺はこんな感じなんだが」

すると、不意に千影がカードを差し出してきた。

どうやら無事にステータスを開けたようで、黒い板の表面に光る文字が映し出されている。

「わたしにも見せて下さい」

夜行は興味津々な感じで割り込んできたクリユスと一緒に、その内容を読んだ。

|||||

『鬼島 千影』

レベル1

クラス：機甲將軍

称号：無し

HP (ヒットポイント)：5000/5000

MP (マジックポイント)：60/60

SP (スタミナポイント)：350/350

STR (筋力)：100

VIT (耐久力)：90

INT (知力)：15

RES (抵抗力)：80

DEX (技巧力)：30

AGI (速度)：50

▼個人技能

古傷(頭)：頭を強く打って出来た古傷。INTマイナス補正。

技術レベル6：数多くの喧嘩で培われた技術。格闘戦での能力補正。

男の友情：特定の人物がパーティ内に居る際、攻撃力10%アップ。対象者『戌伏夜行』。

日々鍛錬・筋トレ趣味。STR上昇率アップ、INT上昇率ダウン。

▼クラス技能

機甲マスタリーレベル0…機甲系アーツを習得可能。

鎧の加護…全身鎧を装備時、INT、MP以外の全能力上昇。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

平たく言ってしまうえば、『クラス』とは才能。『技能』とは努力により得た結果である。クラスはこの世界の住人なら誰もが持っているとはいえ、もちろん別世界の者には当てはまらない。

故に召喚の際に与えられるのだが、総じて強力な物となり易い。各能力も、それに応じて強化されると言う。

現に千影のステータスを見たクリュスは、目を丸くして啞然としていた。

「これってどんなもんなんだ？ ついか何だよ、このマシナリーなんてらって」

「マシナリー……？ まさか、機甲將軍ですか!？」

「お？」

興奮した様子で鎧をガシャガシャ鳴らし、駆け寄りながら叫んだのは、今まで1度も口

を開くことのなかったクリュスの護衛。

周りを囲んだ者達もまた、ざわめき始める。

「始皇帝アレクサンドラ様がお持ちであったという稀少クラス！ 纏う鎧を意のままの形へと変え、白兵戦においては最強のひとつに数えられる騎士の憧れ！」

「お、おう。そうなのか」

「……ステータスの高さも驚きです。我が国の一般的な兵士の能力平均が大体30弱、HPやSPも150あればいい方。この数値なら、すぐにでも近衛隊に所属できるくらいです。レベル1でこれなんて予想以上……まあ知力はかなり残念な様子ですけど」

「残念言うな!!」

憤慨する千影だが、実際の数字がそう物語っている。

彼の成績が不時着寸前の低空飛行であることをよく知っている夜行からすれば、妥当な評価であった。

「では、オレはどうだ？ こんな感じなんだが」

続いてパーソナルカードを差し出したのは雅近。

そのステータスは、このような感じであった。

『伊達 雅近』

レベル 1

クラス…滅魔導

称号…無し

HP…110 / 110

MP…600 / 600

SP…90 / 90

STR…30

VIT…25

INT…105

RES…95

DEX…55

AGI…40

▼個人技能

怠惰…生来の怠け者。取得経験値10%ダウン。

秀才…優れた頭腦の持ち主。INT上昇率アップ。

幼馴染本願…パーティメンバーに『戌伏夜行』が居る場合、全能力ダウン。

不屈の精神…曲げることのない信念。INT、RES、MP上昇率アップ。

▼クラス技能

殲滅魔法マスタリーレベル0…殲滅系魔法を習得可能。

精神の泉…MP回復速度上昇。上昇率はMP最大値とINT値に依存。

術式合成…異なる2つの魔法を組み合わせ、行使することが可能。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

…個人技能とやらが半分近くアレなことは置いておこう。
クリュス達の反応を見るに、こちらも結構凄いらしかった。

「滅魔導！ なんと、またはも稀少クラスではありませんか！」

「殲滅戦において最強のクラス…チカゲ様に続いて、数千から数万に1人の稀少クラスが一気に2人も…既にこれだけで、大金をかけ召喚の儀を執り行った価値があまりした」

白兵戦特化らしい千影に、強力な魔法使いである雅近。

想像を超える素質を備えていたらしい2人に、周囲は興奮冷めやらぬといった様子である。

「魔法使いか。忙しなく動かずに済むのはいい、まさに天職だ」

「マサは平常運転だなあ……そだ、鳳龍院さんはどうだったん？」

「え!？」

何気なく夜行がそう尋ねると、躑躅はどろろというワケか引き攣った表情で、パーソナルカードから顔を上げた。

どうしたのかと思いい、首を傾げつつ近寄る。

「? 何かステータスにおかしなことでも——」

「そ、そんなことありませんよ!? 至って普通、極めて普通です!!」

さつとカードを背後に隠し、じりじり後ずさりながら笑みを浮かべる躑躅。努めて冷静を装っていたが、内心では気が気でなかった。

(こ、こんな物を誰かに見られるワケには……!)

躑躅は頬に冷や汗を伝わせ、必死に愛想笑いで誤魔化そうとする。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

『鳳龍院 躑躅』

レベル1

クラス…強奪者

称号…無し

HP…80/80

MP…120/120

SP…70/70

STR…20

VIT…20

INT…60

RES…50

DEX…90

AGI…25

▼個人技能

本性偽装レベル8…己を偽る技術。卓越しており、日常の態度からこれを見破ることは

困難。

サディスト…他者を痛め付けることに快感を覚える。攻撃力30%上昇、防御力30%ダウン。

楽器演奏レベル4…楽器を扱う技術。アマチュアクラスでは最上級。

権謀術数…裏での暗躍に秀でている。諜報、政治能力に補正。

▼クラス技能

強奪マスタリーレベル0…強奪系アーツを習得可能。

エクスペリエンス・グリード…取得経験値20%上昇。

ピックポケット…スリの成功率上昇。上昇率はDEX依存。

アンロック…鍵開けの成功率上昇。上昇率はDEX依存。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

彼女もまた、紛れもない稀少レアであった。

強奪者。あらゆる物を『奪う』ことに特化したクラスで、極めれば『レベル』や『ステータス』といった形のない物さえ奪取可能となる。

しかし躑躅からしてみれば、取り敢えず今はそんなこと凄くどうでもよかった。

（こんな見られたら、私の今まで築き上げてきたものが全部パーじゃない！ 何とか、

この場合は誤魔化さないと……！）

プライベートも何もあったものではないパーソナルカードに怨みの念を飛ばしつつ、躑躅はほわほわとした笑みで話題を変える。

「え、えっと……そ、そうだ！ 戊伏君はどうだったんですか？ 気になります、見せて

下さい」

「俺の？ ああ、そーいや、ステータスが出てこないんだよ……おーい、お姫さん」

躑躅の態度に若干違和感を覚えつつも、自分のカードが機能しなかったことを思い出す夜行。

九々やサクラのステータスを興味深げに見ていたクリユスの方へ夜行が歩いていくと、躑躅はホッと息を吐いた。

ちなみに、パーソナルカードのスキル欄は任意で隠すことが出来る。

後日それを知った躑躅は、真っ先に個人技能の幾つかを隠蔽するのであった。

「クク様は『狙撃手』ですか、早急に銃を手配しましょう……サクラ様？ この個人技能にある『腐敗思想』って何ですか？」

「……さあ、身に覚えがないわ」